

緒言

特集…《植物を描く／植物で描く》

——ドイツ語圏の美術でたどる植物表現の可能性——

これは、明治学院大学文学部芸術学科・言語文化研究所・ドイツ語圏美術史研究連絡網共催のもと行われたシンポジウムの記録である。

日時…二〇一二年十二月二日(日)

場所…明治学院大学白金校舎二号館二四〇一教室

人を取り巻き、その衣食住を支え、自然環境としても、また祭礼用・薬用・観賞用としても人の生と深く関わってきた植物。人はその恵みを愛でるだけでなく、植物に導かれるようにして、生命について、はかなさと強靱さ、循環と連続、多様性と規則性、あるいは美について、さまざまな思いを巡らし、ある時はその思いを植物に託して来ました。古来造形においても、植物は身近なモチーフとして人の周囲を飾るだけでなく、象徴として宗教性や世界観を代弁し、分類や系統を可視化するモデルを提供し、また表現者の自然観や生命観を静かに物語つてもいます。

本シンポジウムは、このように大きな広がりを持つ植物の造形表現について、ドイツ語圏の美術史を専門とする研究者が集まり、互いの得意分野を切り口として、この地域では植物をいかに造形化してきたか、また植物造形を通じて何を伝えようとしてきたかを改めて問い、植物造形の可能性について考える試みです。

ドイツの美術活動が戦禍の影響で低調だった十七世紀に於いては、オランダ十七世紀美術史を専門とする小林頼子さんをゲストにお迎えし、異なる視点から問題提起をしていただきます。

(大原まゆみ)